

あの子の名前を呼んで

金村詩恩

夕食後のリビングには焼酎を飲む母とはす向かいでテレビを観るわたししかいなかった。いつもやっている番組がおやすみで、リモコンを適当に押す。

「六〇年代から軍事政権を率いた朴正熙氏の娘で……。」
買ったばかりのプラズマテレビから隣国の女性政治家が大統領に当選したニュースが流れ、五月の授業を思い出した。

「来年入るゼミの先生、学生のころ、民主化運動をやったみたいで、文在寅を応援するって言ってたよ。」

「ああ、そうなんだ。」

酒を飲むとおしゃべりな彼女が素っ気なく返事をしたのに珍しさを感じた。

「昔、行ってたんでしょ？」

若いころ、韓国に何度か渡っていたのは亡くなった祖母から聴いていた。

「もう、いまとは違うよ。わたしが行ってたときは、K-POPのお嬢ちゃんたちみたいな格好してたら『キーセンか？』って街のおじさん、おばさんたちに怒られたよ。」

「キーセンってなに？」

聞きなれない韓国語に戸惑った。

「コールガールよ。祖母おばあさんとソウルの叔父さんに会いに行った。待ち合わせのホテルのエントランスで太ももの出た服の女が背広を着た日本人に値段言ってるのを見て、わが国はこんなに貧しいのかって、情けなくなつたわ。でも、そこから発展させたのが朴大統領だよ。さっき、お嬢さんが受かったっ

ていつてたけど、あの時代を知ってれば当然だね。」

語気を強めていった。

「でも、自由はなかったんでしょ？」

運動の同志が突然、拘束された話を教室で聞いたのを思い出して、訊ねる。

「そう。先に豊かになるのが目標だったから。光州が大変なことになったのを知って、本国の親戚たちに連絡したのは夜中だった。KCIA（韓国中央情報部）に聴かれてたからね。」

グラスにふたたび口をつけ、話しつづける。

「大統領を自分たちで決められるようにしたのは学生たちだった。ソウル大学に行った年、街を歩いてたら、『軍部独裁反対』とか『光州市民の死を無駄にするな』みたいなシユプレヒコールを上げてるデモをやってて、警察が催涙弾を撃ってくるんだ。巻き添えになって、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった。あれを見たのはしばらくしてからだったかな……。」

饒舌だった母は急に言葉を詰まらせ、残りの酒を一気に飲みほした。何分かの沈黙でニュースはほかの話題を伝え続けているの気づいたとき、口を開いた。

「在日の留学生何人かでキャンパスにいた。校舎の屋上に学生が立ってて、なんだろうって話してたら、身体に火をつけて、飛び降りた……。炎の塊が地上にドスンと落ちて、

ひとの燃えた臭いがした。なんで偉くなって国を動かそうとしなかったんだらうって、思ったよ。嫌になって帰ったあと、自らの手でやっとな民主化を勝ち取った。でも、若い生命が失われなきやいけなかったのかね。わたしには分からないよ……。」

彼女の目には涙が浮かんでいた。

「しかし、日本は情けない。こないだの総選挙も投票率が低かったんだろ？」

急に政治の話題になって、混乱しそうになったが、たまにたまに新聞記事を思い出した。

「過去最低だったらしいね。」

「どこにも入れたくない気持ちには分かるけど、帰化して、選挙権を手にしてから、一回も棄権したことはない。あんたはちゃんとしてるだろうね？」

わたしを睨んだ。

「当たり前じゃん。」

「よかった。苦労して書類集めた甲斐があったよ。韓国籍のままだとひと扱いされない、一票もない。だったら、世の中を変えるために文句をいえるチャンスがあった方がいい。」

そういつて台所に行き、二杯目を作りはじめた。

テレビ画面に目を移すと、音楽番組の二時間スペシャルになっていった。中高生に人気らしいK-POPアイドルが

「今年もあと僅かですけど。」とわがわがで、年末を感じた。ゼミに入ってから、学園祭の研究発表会に向けて、準備が忙しく、時の流れを早く感じた。研究室で進捗報告したときだった。

「おい、釜山に留学してみないか。」

教授がわたしを指さして、唐突に誘ったので「はい？」と戸惑いがこぼれ出た。

「『はい』はないだろう。」

一緒にいた同期が苦笑した。

「だって、留学なんて考えてなかったし、韓国語の成績もよくないし。」

「言葉なんて、いまからやればいいよ。行くからちょっと考えといて。」

彼は優しくいった。

家に帰って、親に話したら、喜んだ様子で韓国行きを勧めてくれた。翌日、「行きます」と伝え、一年間の留学があつてなく決まった。研究発表会が終わると、準備に追われた。

旅立つ前日の夜だった。夕食のとき、父が「スパイに間違われるなよ。」と心配そうにいいはじめた。

「そんなことあるわけないじゃん。」

笑っていたら、母が「あっちじゃ、いろいろあるから真剣にいつてるのよ。電話だって盗聴されてるかもしれない

から、夜中にかけなさい。」といった。これからどんな場所へ行くのか不安になった。

「ぎょうはこの文法をやります。」

語学堂の授業は到着して、一週間後にはじまり、一ヶ月で初級文法に入っていた。わたし以外の生徒は全員、中国から来ていて、教室では韓国語だけで話すようにいわれていた。はず向かいの彼が、開いた教科書の陰で、スマホを見ていた。こういう奴、どこにでもいるんだなと思ったとき、突然、驚いた顔をして、隣の子に話しかけた。「静かにしなさい！」と注意されたが、彼は「船が」といいながら、スマホを見せた。先生が「本当？」と声を出し、ホワイトボードに船の絵を描いて、いった。

「高校生たちを乗せた船が沈んだそうです。」

絵の上に、大きなバツを書いた。

休み時間、職員室の前を通りかかった。隣のクラスの先生が沈没現場の映るパソコンモニターを観ながら、カップラーメンを食べていた。翌日、毎年恒例の運動会が延期になったのを知った。哀悼の意を示すため、自粛しなければいけないかららしい。

「皆さん、勉強は頑張ってますか？ 運動会は一〇月になりましたが、こちらはきょうやることになりました。」

「亡くなったひとたちへ冥福を祈ります」と書かれた横断幕が広場に掲げられ、イベントのポスターに、延期を知ら

せるシールが貼っていた街の光景に日本から来た留学生同士で、3・11のあとみたいと話していたとき、日程の関係

でずりせない行事があるみたいとだれかがいった数日後、作文大会が開かれた。

「院長先生、有難うございました。つづきまして、先日起きたセウォル号の事故で犠牲になった方々に黙祷を捧げます。黙祷。」

目を閉じて、両手を組んだ。

午前中で終わり、寄宿舎に戻ろうとした。

「賞貰ったんだって？ 頑張ったね！ 奢ってあげるから、昼ごはん食べに行こう！」

いつも気にかけてくれた先生が流暢な日本語で誘ってくれた。

「有難うございます！」

思わず、照れ笑いをした。

連れて行ってくれた食堂は学生たちで溢れかえっていた。参鶏湯の食券を買い、長い列に並んだ。ふと、見上げると大きな液晶テレビに大統領がなにか読み上げる様子が映っていた。なにも聴き取れなかったが、ポツッと覗いていたら、「つぎの学生！ おい！ そのこ！ 早くしろ！」と食堂のアジュンマに釜山弁で急かされた。

「あら、遅かったじゃない。」

先生は先に食べていた。

「すみません。なんか混んでて。」

トレーをテーブルに置き、はず向かいに座った。

「さっきネットニュース観てただけど、日本の援助要請を断つてたみたいで、腹が立つちゃって。」

さっきのテレビはこれ伝えてたのかなと思った。

「二年前は文在寅に入れたの。盧武鉉さんが好きだったし、この地域で弁護士をやってたしね。」

「そうなんですか！ 自分の大学の先生も入るっていつてましたよ。」

「あのひとは調子のいいこといわなかったからね。でも、いまの大統領は出来もしない公約ばかりで、案の定、なにもできてない。国民を騙したね。お父さんは経済成長させたかもしれないけど、大企業ばかりが儲かって、福祉はなかったし、反対するひとたちは殺してんだから。あのひとが受かったのは、昔を忘れられないおじいちゃん、おばあちゃんたちが『閣下のお嬢さん』って一票入れたからよ。」

「うちの母、軍市政権のときにいたみたいで、話してくれましたよ。」

「えっ！ 本当に？ どうして？」

「もう、国籍は日本なんですけど、自分、在日で。来る前日に、スパイに間違われるとか、盗聴されてるから夜、電話しろとか、両親からいわれましたよ。」